子どもが まんなか
いわてのWAっこ

いわて幼児教育センター通信
No.6　令和７年２月１７日発行
発行・編集
岩手県教育委員会事務局学校教育室
（いわて幼児教育センター）
本通信は岩手県 HP からダウンロードできます
https://www.pref.iwate.jp/kyouikubunka/kyouiku/gakkou/1006358/1058868.html

きらきら☆いわてっこ

子どもが主体的に取り組む行事を目指して～小正月行事～

『子ども主体の保育』をどう捉え、どう実践していけばよいのか。皆さんの園でも話題になるテーマではないでしょうか。

今回は、子ども主体の行事の在り方を考え、工夫して実践した園を紹介します。この園では次の行事を通して取り組みました。

第１弾・・・・・誕生会
第２弾・・・・・クリスマス会

試行錯誤という言葉がぴったり合うくらい、挑戦と振り返りがあったと伺いました。その中で子どもたちも保育者も、進んで挑戦することを楽しんだとのことでした。

そして、第３弾は小正月行事への取り組みです。例年は保育者主導で始まる行事でしたが、今年は子どもたちへの「小正月って何だろう」の投げかけから始まりました。

子どもたちは興味津々で「小正月って何だろう」に取り組み始めました。話し合いをし、「知らないことは調べればいい」という持ち前の探求心と好奇心をフル稼働し、家族に聞いたり、園の近くの神社に取材に出かけたり、ICT を活用して様々な地域の小正月について検索してみたりしました。

このように、つながりとプロセスを大切にしながら『自分たちの園の小正月』を作り上げていきました。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

社会生活との関わり

家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

当日までに、今年はどんな１年になってほしいかグループごとに話し合い「家族が健康に過ごせますように」「みんな元気で楽しく暮らせますように」「お米や、野菜や肉や卵がたくさんとれますように」と願うことに決めました。そして、自分たちの願いを絵に表して、当日みんなの前で発表しました。

神社の宮司さんに教えてもらったことや、インターネットで調べたことも発表しました。神社に行ってお団子を御馳走になったことや、自分たちも甘酒を飲んでみたかったことも、嬉しそうに発表してくれました。

栄養士の先生に教えてもらって団子作り。食紅の量を加減しながら自分たちで考えて入れました。途中見学に来た2歳児さんに「見てごらん可愛い色になったでしょ。」「触ってごらんプニプニだよ」と自分たちが味わった感触を、小さい子にも味わわせたい思いが溢れます。

保育所保育指針解説 p72　幼稚園教育要領解説 P62　幼保連携型認定子ども園教育保育要領解説 P57 から抜粋

こうした幼児期の身近な社会生活との関わりは、小学校生活において、相手の状況や気持ちを考えながらいろいろな人と関わることを楽しんだり、関心のあることについての情報に気付いて積極的に取り入れたりする姿につながる。また、地域の行事や様々な文化に触れることを楽しんで興味や関心を深めることは、地域への親しみや地域の中での学びの場を広げていくことにつながっていく。

コラム☆かんきょう

訪問支援の場面から

1　子どもが夢中になって遊び、よく考える環境 ～２歳児編～

「 じぶんでやってみたい」 “見立て”と“つもり”の世界

例えば、タオルをしっぽに見立ててネコになって遊ぶ、毛糸をラーメンに見立ててお客さんにごちそうするなど、目の前にないものを別のもので代用して遊ぶということは、象徴機能が発達している証です。『つもりの世界』は、見立てあそびだけではなく、「○○してから△△する」と自分なりに決めている「つもり」もあります。自分の「つもり」を邪魔されたりすることを嫌う時期でもあります。自我が強くなり、指示されることを嫌がったり、大人の働きかけに対して「イヤイヤ」と返したりすることがよくあります。これは次の活動や遊びを楽しみにしたり、自分で決めたことを自分なりの段取りでしたりすることで、身の回りのことを“じぶんで”という意欲が高まるとともに、行動への見通しをもつことにつながっていきます。

かかわる大人もイメージの世界を楽しみましょう

体をいっぱい動かして

思うように体が動かせるようになり、体を使って遊ぶことが楽しくなります。また、お気に入りの場所があると、安心して過ごすことができます。繰り返し遊ぶ中で手足の力もより高まります。大好きな大人が一緒に遊んでくれることが一番の意欲につながっていきます。

動線を考慮し、安全に配置しながら、体を動かすことを十分に楽しめるようにしましょう。

こんな関わりを心掛けましょう

生活の自立がほとんど確立する時期です。それは、自分の体の変化に気付く営みです。「おなかいっぱいかな？」「おしっこ出るかな？」「寒いかな？」など、その時の子どもの体の状況にぴったりの言葉をかけてもらうことで、子どもは『行動の主人公』に育っていきます。

自我が育ち、喧嘩や叩く、噛むなどの行動が増えますが、子どもの行動には必ず意味があります。どんな姿にも共感し、子どもの行動の意味にぴったりの言葉を伝えたいですね。その繰り返しの中で、子どもには安心感と信頼感が育ち、言葉でのやり取りができるようになっていきます。

無理なく自分でできた喜びにつなげていきましょう。

こんな環境を創りましょう

この時期の子どもたちの遊びは一見すると一緒に遊んでいるように見えますが、自分の「つもり」で一人遊びを楽しんでいることが多いものです。そのため、その子の楽しみ方を十分受け止め、認める言葉やつなげる言葉を話しかけたいものですね。

「もの」や「気持ち」や「場所」の共有が子ども同士をつなぐきっかけになります。

友達の真似をして喜んだり、一緒の場にいることや同じ動きだったりということが嬉しい気持ちにつながるようです。その「模倣の力」は人との関係の中で学ぶ力の表れとして、大事な発達でもあります。

友達と一緒の生活、楽しさや面白さを感じられるような遊びの環境を多く作りたいですね。

玩具の準備や、場の構成を工夫しましょう。